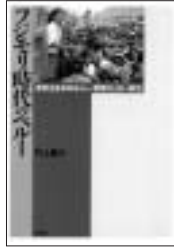


資料紹介



村上勇介著『フジモリ時代のペルー：救世主を求める人々、制度化しない政治』平凡社 2004年 586ページ

本書は、近年日本世論の目がラテンアメリカ地域に向かう最も強い契機となったペルーのフジモリ前政権の全体像を明らかにする大作である。著者は長くペルーの日本大使館に勤務し、現地の研究所との共同研究を何度も実施してきた。フジモリ政権についても、その初期から動向をつぶさに観察した数十年の経験を学術的な水準に高めたのが本書である。

本書の価値はいくつか挙げられる。第1に、フジモリ政権の誕生から辞任まで包括的に取り上げたこと自体、類書がないこと。第2に、評価が極端に分かれるフジモリ政権について、膨大な資料を基にできるだけ客観的な分析を試みていること。第3に、ラテンアメリカ政治研究の中でフジモリを特殊視する従来の学説に反対し、制度化が進まないペルーの政治風土こそがフジモリを生んだとして、新制度論的な見地からその実証を行なっている点である。

本書の内容は大きく三つに分けられる。一つ目(1章)で19世紀からのペルー政治の歴史的特質を説明し、二つ目(2～6章)でフジモリ政権の誕生から崩壊までを時系列的に詳述している。そして三つ目(終章)で、それまでに詳しく分析されたフジモリ政権の成り立ちや支持基盤、政治手法などが、本書の最初の章に示されたペルー政治の伝統的な特徴に合致していることを示し、著者の命題の理論的な実証を試みている。

フジモリ政権の全貌を知りたい向きにも、同政権を政治学的にどう捉えるべきか考えたい向きにもおすすめされる好著である。これだけの大作を上梓された著者の研鑽に敬意を表したい。

(山岡加奈子)



今井圭子編『ラテンアメリカ開発の思想』日本経済評論社 2004年 xi + 262ページ

本書のタイトルからは、開発理論の解説を予想させるが、良い意味で期待を裏切られる。むしろ、ラテンアメリカの開発に関する代表的な思想家たちの思想形成史、とも呼べるものになっている。

全体は14章からなり、各章で1人あるいは2人の思想家を取り上げ、彼らの生い立ち、時代背景、政治的活動について詳述している。取り上げている人物は、ポリバル、アルベルディ、サルミエント、マルティ、フローレス＝マゴン、マリアテギ、フレイレ(2人)、ペロン、プレビッシュ、カストリ、グティエレス、メンチュウ、アリアス、カルドーゾ(以上、苗字のみ)と、19世紀の独立期から今日まで、時期的にも地域的にもラテンアメリカを広くカバーしている。

ラテンアメリカは、欧米と歴史的な結びつきが強いが、その圧倒的な知識や経済力の蓄積の差を前にして、ラテンアメリカの国々の独自の発展の道を模索する姿勢が強く描き出されている。また、巻末に15人の思想家と、ラテンアメリカに関する歴史が並列で記されている年表が掲載されていて、思想家をその時代の中で理解する上で助けとなる。

ラテンアメリカにおける経済・社会の問題意識を強く有し、その解決のために一生を費やした人々の生涯を知ること、ラテンアメリカの歴史をミクロな側面から深く理解することができるであろう。執筆者たちは、いずれも日本を代表するラテンアメリカ研究者であるが、それぞれ取り上げた思想家に対する愛情のようなものも伝わり、読み物としても大変興味深いものになっている。

(北野浩一)



田中高編『エルサルバドル, ホンジュラス, ニカラグアを知るための45章』明石書店 2004年 279ページ

世界の国々の事情を身近な話題に引き寄せてわかりやすく紹介した, 明石書店の「エリア・スタディーズ」シリーズの1冊である。

タイトルからうかがえるとおり, 三つの国の事情がテーマごとに各国15項前後, 合わせて45項の短い文章で綴られている。選ばれたテーマは地理, 歴史, 経済, 政治, 社会, 文化の多岐の分野にわたる。編著者を中心とする主に4人の各国通が執筆を分担しているが, 執筆者の専門や執筆担当国との関わり方の違いを反映して, テーマ選びは各国それぞれに個性的である。三つの国とも編著者が担当する経済と政治の項には多くの紙面が割かれ, 叙述内容も幅広いが, 各国異なる執筆者が担当するその他の項については, 例えばホンジュラスの部では先住民文化の紹介に, またニカラグアの部では文学の紹介に重きが置かれている。

現地経験が豊富な執筆者たちならではの興味深い内容となっている。例をあげれば, 政治と経済の項では, 20年以上にわたり身近に, 独裁, 紛争, 民主化へと続くこの地域の軌跡を観察してきた編著者により, 国造りの困難さをうかがわせるエピソードが, 個人的体験も含めて, ところどころで紹介されている。また文化の項では, 『星の王子さま』で有名なフランスの作家サン＝テグジュペリのエルサルバドル人の夫人をめぐる, 日本ではあまり知られていないエピソードが紹介されている。

旅行ガイドブック的な情報ではもの足りず, さりとして専門書は敷居が高いという, もう少しこれら三つの国を知りたい人におすすめの本といえよう。

(星野妙子)



吉田栄人編『メキシコを知るための60章』明石書店 2005年 356ページ

本書はタイトルにあるように, メキシコに関する一般向けの紹介書である。ただし, 「はじめに」において述べられているように, メキシコに関するミニ百科事典となることを避け, 執筆者の専門を背景に項目を絞り込み, それを掘り下げた紹介書であるといえる。その執筆といえば, 編著者自身が文化人類学専攻で, この他もう1名文化人類学専攻の執筆者が加わっている。その他の筆者の専門は, 歴史学, 人口学それに経済学となっている。そのため, 本書では人類学的, 歴史学的なテーマが多く扱われている。

このような執筆の専門を背景として, 本書の構成は以下のようになっている。まず第1部は, 「民俗芸能」というタイトルが付され, メキシコにおける民族舞踊が歴史的にどのように形成され, それが今日どのような状況にあるかが記されている。第2部「民俗芸能の裏舞台」では, 民族構成, 先住民言語また民族服などメキシコの民族文化を生み出してきた背景が記されている。第3部の「フィエスタ装置」のフィエスタとはスペイン語で祭礼の意味であるが, そこでは教会堂, 仮面また祭礼組織など祭礼にまつわるテーマが扱われている。

第4部から第7部まではメキシコの歴史が筆者の専門に引きつけて書かれている。第4部では先スペイン時代の文化や神話, 第5部ではスペイン人による征服と植民地支配期におけるメキシコ社会・文化の変容, 第6部ではメキシコ独立によるメキシコ国家の形成を, 最後の第7部では制度的革命党の単一支配の行き詰まり, 対外累積債務危機, 北米自由貿易協定, また国外出稼ぎやチカーノに関する記述など, 現代メキシコに関する記述がなされている。本書はメキシコに関心を持つものにとって, 現代メキシコ人また現代メキシコ文化がどのように形成されてきたのかに関し, 掘り下げた情報を提供してくれる。

(宇佐見耕一)



八杉佳穂編『マヤ学を学ぶ人のために』世界思想社
2004年 ix + 291ページ

「マヤ学」というと、人は古代マヤ文明を対象とした研究(考古学的研究やマヤ文字の解読)を思うかも知れない。しかし古代マヤ文明を築いた人たちと同じ民族が、今日メキシコ南部とグアテマラおよびその周辺部に約800万人居住しており、現代のマヤ系諸民族を対象とした研究や、植民地時代の歴史的研究もある。マヤのどの面の研究をするにも総合的にマヤを理解する視点が必要であり、それが総合学としての「マヤ学」であるという。

日進月歩のマヤ学の第一線で活躍する本書の執筆者たちが提供する多くの知見や解釈は、「神秘的でユニークな謎の文明」というステレオタイプなマヤ・イメージを払拭するのに役立つ。これから本格的にマヤ学を学ぼうとする人だけでなく、マヤ愛好者にとっても本書はおすすめである。

次に本書の内容のいくつかを紹介しよう。マヤ文明は「究極の新石器時代の都市文明」と位置づけられる(3章, 6章)。マヤ文明は多様な環境に適応した非均質的な文明だった(6章)。マヤ文字は日本語の書記体系とよく似ており、語を表す表語文字と音を表す音節文字からできている(5章)。(現代の)マヤ諸語はマヤ文明の言葉であり、マヤ諸語の研究はマヤ文字の解読のために必要である(10章)。植民地時代に、マヤ人たちはきわめて能動的ともいえる態度でスペイン文化を取り入れていった(7章)。マヤ研究ではピラミッドや石碑といった保存のきく「かたい文化」だけでなく、保存のきかない一過性の「やわらかい文化」の持続性にも注目したい(8章)。

本書の執筆者は、編者の八杉の他、猪俣健、佐藤悦夫、青山和夫、中村誠一、大越翼、落合一泰、池田光穂、杓谷茂樹(執筆順)である。

(石井章)



山崎眞次著『メキシコ 民族の誇りと闘い: 多民族共存社会のナショナリズム形成史』新評論 2004年
316ページ

本書の目的は、メキシコにおける古代から現代までのナショナリズム生成の系譜を明らかにすることにある。この試みのため、筆者は、メキシコの民族的アイデンティティを論ずる上で有効と思われる歴史的事件・事象を抽出し、それを手がかりとして、各時代のナショナリズムの形態を論じている。

たとえば、コルテス率いるスペイン軍勢にアステカ王国があっけなく敗北した要因として、古代社会が、朝貢国と独立国が混在した部族国家の巨大な集合体にすぎず、ナショナル・アイデンティティを求心力とする国民国家が未形成の状態にあったことを指摘。

一方、植民地時代後期、元来下層階級の民間信仰であったグアダルupesの聖母が、クリオージョ知識人によってメキシコ独自のカトリック信仰として理論化され、それが非白人層とクリオージョをつなぐ、共通意識構築の触媒の役割を果たしていったと考察。

他方、メキシコ革命後のカルデナス政権期(1934～38年)に形成された資源ナショナリズムについて、同政権による石油企業の収用と国有化の実現は、メキシコが革命によって国民国家建設に成功し、人々が国民として一致団結して政府を支援する体制が構築されたことによるところが大きいと分析している。

メキシコのナショナリズム形成に関わる多彩なエピソードが抽出され、歴史検証されている本書は読み物として面白く、同国の民族史を学びたい方におすすめの一冊となっている。

欲をいえば、現代メキシコ社会の異なる民族間に存在する民族的アイデンティティの相違と葛藤についての分析がいささか表層的な点が残念であった。

(村井友子)



竹内佐和子著『月の涙とアルゼンチン：南米移住 悲喜劇を越えて』川辺書林 2004年 253ページ

アルゼンチンには約3万人の日系人がいるといわれている。しかし、日本からの移民は1960年代で終わり、1980年代以降は逆にアルゼンチンの日系人が日本に出稼ぎに来るようになった。そのようななか、わずかではあるが個人的にアルゼンチンに定住する日本人や日本人家族がいる。

本書は、平成になってからアルゼンチンに移住した日本人一家の体験談である。私の知る範囲では、1980年代以降の日本からの移住者は単身でアルゼンチンに渡り、現地で仕事と伴侶を見つけ定住するというパターンが多いように思え、本書の筆者のように家族で移住するのは珍しいケースではないか。

まったく未知の国に来た筆者は、新たな発見やとまどいの連続であり、そうした記述が大部分を占めている。そのような意味で、本書はアルゼンチン社会の紹介書となっている。本書の中で特に興味をひかれた記述の一つに、筆者の子供の通う日亜学院に関する記述がある。日亜学院は、アルゼンチンに定住する日系人が中心となり運営している学校で、午前中にアルゼンチンの正規のカリキュラムをこなし、午後日本語の勉強を行なう。日亜学院は、アルゼンチンに多いバイリンガル校の一種で、そのなかには英語を並行して教える学校が最も多く、フランス語校がそれに続いている。日亜学院では実際に校内で生徒同士はスペイン語で話すことが多いようであり、筆者と同じようになぜ日系移民は日本語を失ってしまったのかという疑問を抱く。

2001年の経済危機、夫の死を乗り越え、アルゼンチンで生活を続けようとした親子3人は、日系人やアルゼンチン人との助け合いのなかで逞しく生活をしてゆく。本書は、アルゼンチンでの生の生活を知りたい人に向いている。

(宇佐見耕一)



エンリケ・クラウゼ著、大垣貴志郎訳『メキシコの百年 1810-1910 権力者の列伝』現代企画室 2004年 383ページ

メキシコの教科書的な歴史を読んだことのある者にとって、メキシコの独立、その後の動乱の連続は、簡単には納得しがたい、疑問と興味を誘うストーリーだったのではないだろうか。

「メキシコ独立百周年記念日の前夜から、百年間を遡る歴史をカウディーヨ(Caudillo：国の運命を決定した絶対権力者、首領、領袖または独裁者を指すスペイン語)の姿を通して論及し、この時期の歴史の実像と虚像との落差を縮めようとする意図(訳者あとがき)をもった本書は、人物を中心とした歴史記述によって、そうした疑問、興味に応えようとするものといえる。

19世紀前半は、イダルゴ、モレーロスなど独立の闘士たち、アラマン、モラ、そして独裁者サンタ・アナが取り上げられ、後半は、ベニート・ファーレス、ポルフィリオ・ディアスなどが扱われ、彼らの主義主張、信条、心情に焦点をあてて、物語の登場人物たち自身による同時代的、歴史的评价をとり混ぜながら、時代の動きを描写する。著者はまた、そうして、よりバランスのとれた独立、革命、人物評価を目指す意図をもつ。

本書を読まれた読者は、比較的目にする機会の多いイダルゴやファーレスなどの像をより身近なものとして感じたり、メキシコ革命によって倒されるべき独裁者ポルフィリオ・ディアスなどをこれまでとは違った目で見たりすることになることは間違いないだろう。しかし、メキシコの歴史に対する疑問と興味は解消するというより、ますます、募るかもしれない。

なお著者は、この他に、メキシコ革命以後の大統領を扱った2冊の著書をもつ。

(米村明夫)